

第 103 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

女性精神科医師の現況について——卒後 12 年以内の
精神科医師を対象にしたアンケート調査より——

菊地 紗耶^{1,6)}，上原 久美^{2,6)}，橋本 直樹^{3,6)}，小泉 弥生^{1,4,6)}，
吉岡 知子^{5,6)}，杉浦 寛奈^{2,6)}，松岡 洋夫⁷⁾

1) 東北大学病院精神科，2) 横浜市立大学医学部精神神経学講座，

3) 北海道大学大学院医学研究科神経病態学講座精神医学分野，4) 有恒会こだまホスピタル，

5) 高知大学医学部附属病院神経科精神科，6) 日本若手精神科医の会，

7) 東北大学大学院医学系研究科神経・感覚器病態学講座精神神経学分野

ここ数年，医師国家試験合格者に占める女性の割合が増加し，他科領域においては女性医師の勤務実態調査や仕事に対する男女の意識調査が行われている。精神科領域においては海外の調査は散見されるものの国内ではいまだ行われていない。そこで今回卒後 12 年以内の男女若手精神科医師を対象に，勤務形態調査および育児と仕事の両立に関する意識調査を行った。その結果，女性医師の 16%，男性医師の 23% が 12 時間以上勤務，女性医師の 32%，男性医師の 39% が月 5 日以上当直と過酷な労働環境にあること，将来は非常勤勤務や短時間勤務などの勤務形態を望んでいる割合が特に女性に多いことがわかった。また育児と仕事の両立に関する意識調査では，女性で育児などのライフイベントがより仕事に影響すると考え，育児前の女性医師は両立が困難であると強く懸念している現状が把握できた。今後，男女双方を対象に勤務形態の見直しと多様な勤務形態の模索をし，その上で仕事と育児の両立支援策を考えることが必要である。

はじめに

ここ数年，医師国家試験合格者に占める女性の割合が連続して 30% を超え，日本では女性医師が着実に増えてきている。女性医師の勤務実態調査や仕事に対する男女の意識調査が，日本医師会や小児科，麻酔科，産婦人科などの女性医師の割合の多い専門科にて行われている。しかし精神科領域においては海外での調査報告は散見されるものの，日本においてはいまだ報告がみられていない。そこで，今回，現在の勤務状況と課題を明らかにすべく，卒後 12 年以内の男女若手精神科医師を対象にアンケート調査を行い，現状と今後の課題について検討することとした。

研究方法

目的は，現在の勤務形態と将来希望する勤務形態および仕事と育児の両立に関する意識を調査することである。対象は，日本若手精神科医の会 (Japan Young Psychiatrist Organization: JYPO) 会員とその同僚であり，アンケートはインターネット上にて行った。アンケート期間は 2007 年 3 月 13 日より 2 週間で，アンケート調査は無記名でプライバシーの保護を保障した。結果の検定は χ^2 test により行い，期待度数が 5 以下の場合には Yates の補正を用いた。

結 果

I 現在の勤務形態と将来希望する勤務形態

1) 基礎的事項 (表 1)

回答者は男性 37 名 (57 %), 女性 28 名 (43 %) であった。年齢は, 30 歳以下が 30 名 (46 %), 31 歳以上 35 歳以下が 28 名 (43 %), 36 歳以上が 7 名 (11 %) と全体の約 90 % が 35 歳以下であった。勤務先は, 大学病院が男女あわせて

29 名 (45 %), 精神科病院が 16 名 (25 %), 一般病院精神科が 7 名 (11 %), 大学院生が 10 名 (15 %), その他が 3 名 (5 %) であった。配偶者を持つものが, 男性で 18 名 (49 %), 女性で 7 名 (25 %), 子どもを持つものが, 男性で 14 名 (38 %), 女性で 6 名 (21 %) であった。子どもを持たないもののうち, 男性で 18 名 (78 %), 女性で 16 名 (73 %) がいずれ子どもを持ちたいと回答している。

2) 勤務時間 (図 1)

現在の勤務時間 (大学院生を除く) は, 男性では, 8 時間以上 12 時間未満が 23 名 (77 %), 12 時間以上が 7 名 (23 %), 女性では, 8 時間未満が 3 名 (12 %), 8 時間以上 12 時間未満が 18 名 (72 %), 12 時間以上が 4 名 (16 %) であった。一方, 将来の希望勤務時間は, 男性では, 8 時間未満が 10 名 (27 %), 8 時間以上 12 時間未満が 27 名 (73 %), 女性では 8 時間未満が 17 名 (61 %), 8 時間以上 12 時間未満が 11 名 (39 %) であった。将来の勤務時間では女性の方が有意に 8 時間未満勤務を希望しているということがいえる ($p < 0.01$)。

3) 勤務日数 (図 2)

現在の週勤務日数 (大学院生を除く) は, 男性では, 5 日が 19 名 (63 %), 6 日以上が 11 名

表 1

		男性	女性	総計
		37	28	65
年齢	30 歳以下	15	15	30
	31 歳以上 35 歳以下	18	10	28
	36 歳以上	4	3	7
勤務先	大学病院	15	14	29
	精神科病院	9	7	16
	一般病院精神科	4	3	7
	大学院生	7	3	10
	その他	2	1	3
配偶者	あり	18	7	25
	なし	19	21	40
子ども	あり	14	6	20
	なし	23	22	45
	(いずれ持ちたい	18	16	34)
	(未定, その他	5	6	11)

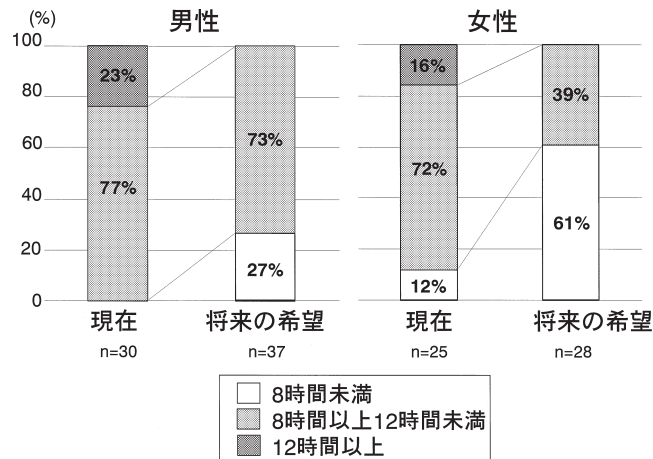


図 1

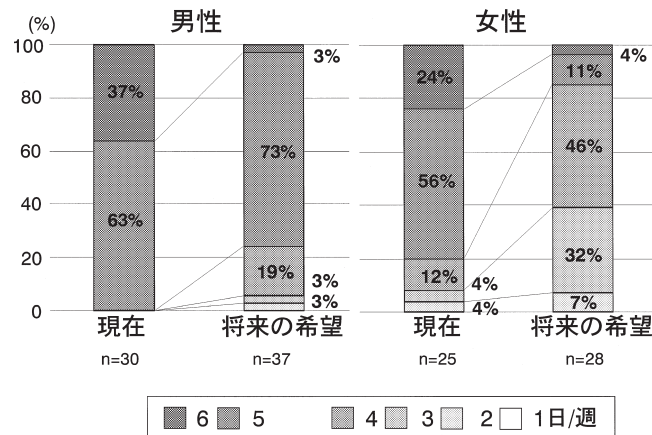


図 2

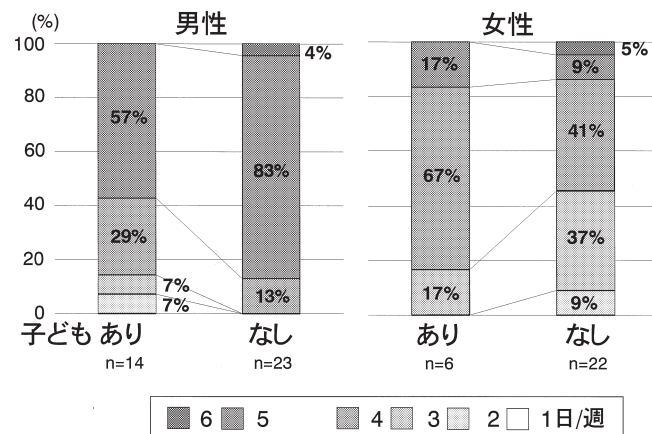


図 3

(37%), 女性では、4日以下が5名(20%), 5日が14名(56%), 6日以上が6名(24%)であった。一方、将来の希望勤務日数は、男性では、4日以下が9名(25%), 5日が27名(73%), 6日以上が1名(3%), 女性では4日以下が24名(85%), 5日が3名(11%), 6日以上が1名(4%)であった。女性に4日以下の勤務を希望する傾向がみられた。

希望勤務日数について、子どもの有無で比較した場合(図3)には、男性で子どもがある場合には6名(43%)が4日以下を希望し、子どもが

ない場合には20名(87%)が5日以上を希望し、子どもを持っているかどうかで希望勤務日数に有意な差がみられた。 $(p<0.05)$ 一方、女性で子どもがある場合には5名(84%), 子どもがない場合には19名(87%)が4日以下を希望する傾向がみられた。

4) 勤務先

表1で示したとおり、現在、病院勤務(大学病院, 精神科病院, 一般病院精神科)が男性で28名(93%), 女性で24名(96%)と大部分を占めているが、将来の希望勤務先(図4)として病

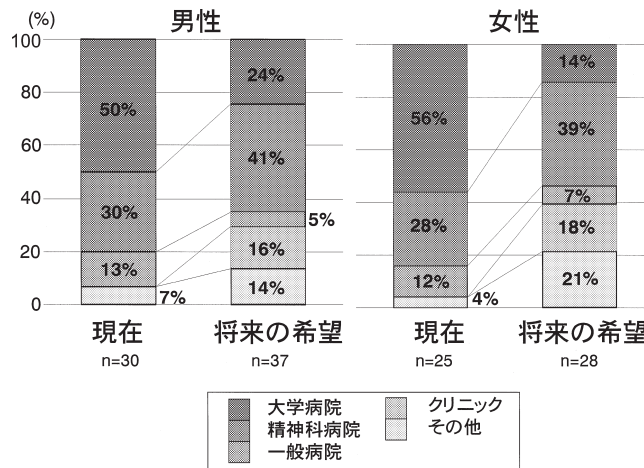


図 4

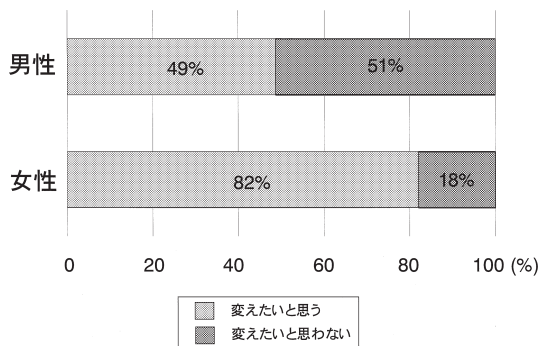


図 5

院勤務を選んだものは、男性で26名(70%)、女性で17名(60%)であり、将来は病院勤務を希望するものが現状に比べ少ない傾向にある。また現在大学病院勤務は男性15名(50%)、女性14名(56%)であるが、将来大学病院勤務を希望するのは、男性9名(24%)、女性4名(14%)と男女とも将来も大学病院を希望する割合が減少する傾向がみられた。

5) 当直の有無と回数

当直は、男性では33名(89%)があり、女性では22名(79%)がありと回答している。回数別にみると、男性では4回/月以下が20名(61%)、5回/月以上8回/月以下が12名(36%)、9

回/月以上が1名(3%)であり、女性では4回/月以下が13名(59%)、5回/月以上8回/月以下が6名(27%)、9回/月以上が3名(14%)であった。

II 仕事と育児に関する意識

以下に示す6つの質問を行った。

1) 育児中にワーキングスタイルを変更したいか？

男性で18名(49%)、女性で23名(82%)が勤務形態を変更したいと考えており、女性で有意に多い($p < 0.01$) (図5)。

2) 具体的にどのように変更したいか？

育児中に勤務形態を変更したいと回答したものへ、具体的な希望変更項目をきいた結果、複数回答で、当直の免除は女性で17名(74%)、男性で15名(83%)、短時間勤務は女性で11名(48%)、男性で10名(56%)、外来勤務のみは女性で11名(48%)、男性で11名(61%)、非常勤勤務は女性で10名(43%)、男性で4名(22%)、勤務先の変更は女性で7名(30%)、男性で4名(22%)、待機の免除は女性で6名(26%)、男性で6名(33%)であった。男女の選択した項目数の平均は、それぞれ2.8、2.7であった。その他、自由記載欄に、残業を減らす、育児

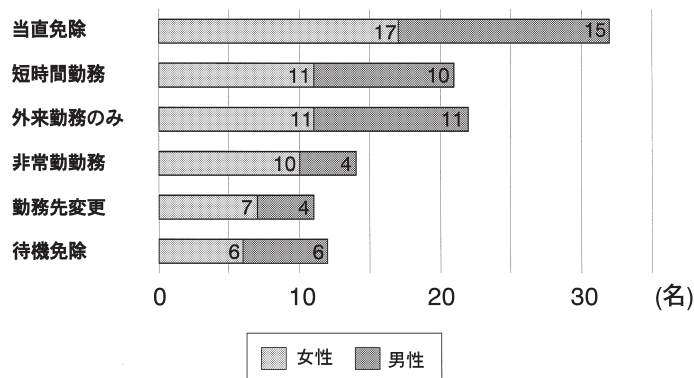


図 6

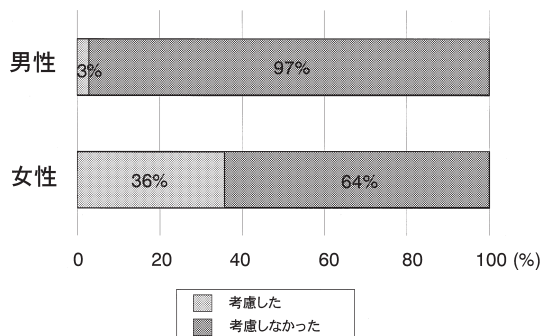


図 7

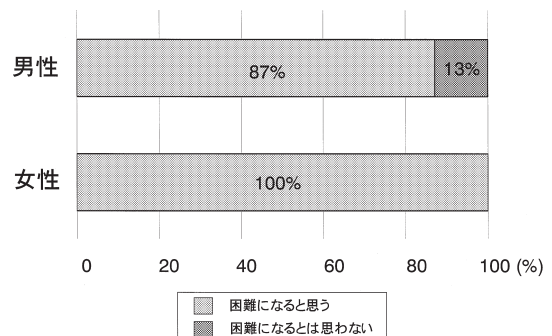


図 8

休暇の取得などの回答が得られた（図 6）。

3) 精神科を選択する際、育児のことも考慮したか？

男性で 1 名（3 %）、女性で 10 名（36 %）が精神科選択時に育児のことも考慮したと回答し、女性で有意に多い（ $p < 0.01$ ）（図 7）。

4) 仕事と育児の両立は困難だと思うか？

現在子どもを持たない男性 23 名、女性 22 名を対象に、仕事と育児の両立は困難になるかと質問したところ、男性で 20 名（87 %）、女性で 22 名（100 %）が困難だと思うと回答している（図 8）。

5) 仕事と育児の両立は困難であるか？

現在育児中である男性 14 名、女性 6 名を対象に、仕事と育児の両立は困難であるかと質問したところ、男性で 9 名（64 %）、女性で 5 名（83

%）が困難であると回答した（図 9）。そのうち、男性で 3 名（33 %）、女性で 3 名（60 %）が困難ではあるが、育児前に予想できた範囲内であると回答している（図 10）。

6) 具体的に仕事と育児の両立で困難だと感じることは何か？

育児前および育児中に両立を困難だと思うと回答したものへ、具体的に困難に感じる項目をきいた結果、複数回答で、「育児の時間が十分とれない」が女性で 21 名（75 %）、男性で 23 名（79 %）、「体力的負担が大きい」が女性で 19 名（70 %）、男性で 11 名（38 %）、「仕事の時間が十分とれない」が女性で 18 名（67 %）、男性で 19 名（66 %）、「プライベートな時間が十分とれない」が女性で 11 名（41 %）、男性で 17 名（59 %）。

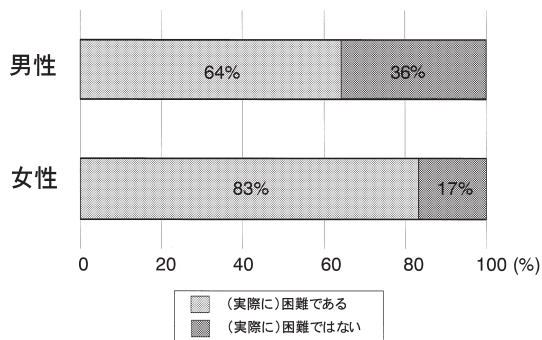


図 9

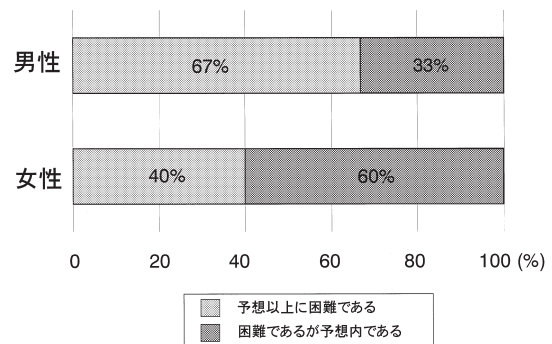


図 10

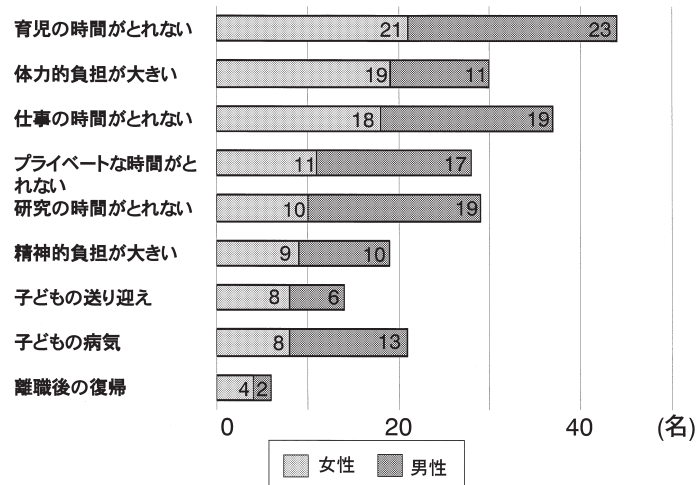


図 11

「研究の時間が十分とれない」が女性で 11 名 (41 %), 男性で 19 名 (66 %), 「精神的負担が大きい」が女性で 9 名 (33 %), 男性で 10 名 (34 %), 「子どもの送り迎え」が女性で 8 名 (30 %), 男性で 6 名 (21 %), 「子どもの病気」が女性で 8 名 (30 %), 男性で 13 名 (45 %), 「離職後の復帰」が女性で 4 名 (15 %), 男性で 2 名 (7 %) であった。男女の選択した項目数の平均は, それぞれ 4.1, 4.0 であった (図 11)。

全体として「育児の時間」, 「仕事の時間」がとれないことを心配する意見が多かったが, 育児中の男性は, 「研究の時間」, 「子どもの病気」を理

由にあげたものが多く, 育児前の男性は, 「プライベートな時間」, 「研究の時間」を理由にあげたものが多かった。育児前の女性は, 「体力的負担」をあげたものが多かった。

考 察

I アンケート対象者の背景について

今回のアンケート調査の対象者背景として, 62 % が未婚で, 69 % が子どもを持たない若手精神科医師であった。また子どもを持たない医師のうち 76 % がいずれ子どもを持ちたいと考えていたため, 今回の結果は, 今後子育てと仕事の両立を

思い描いている世代の意識を反映したものであるといえる。

II 現在の勤務状況について

現状では男性の23%、女性の16%が12時間以上勤務というハードな勤務状況にあるといえる。勤務日数については、全体の60%が週5日勤務であるが、男女別にみると女性の方が4日以下勤務をしているものが多い状況である。当直回数については男女とも約6割が4回/月以下であるが、残りの約4割が5回/月以上の当直をしている。社団法人日本病院協会の「勤務医に関する意識調査」¹⁾では、月3~4回の当直が41%、5回以上が17%であったから、他科と比べて当直回数が多い傾向にあるといえる。

III 将来の希望勤務状況について

約6割が週5日勤務をする現状に対し、将来は男女ともより少ない日数での勤務を希望している。現在男性では平均週5.2日、女性では平均週4.8日の勤務であるが、将来の希望は男性では平均週4.7日、女性では平均週3.4日である。女性では週4日以下勤務を希望するものが多いが、まだ育児前の女性の40%強が週3日以下勤務を希望しているのが特徴的である。育児中の男性は、勤務日数、勤務時間、当直回数に関して、子どもを持たない男性医師とほぼ同様の状態であるが、希望の勤務形態としては、4日以下の勤務を望むものが43%（子どもを持たない男性医師の場合は13%）、8時間以下勤務を望むものが36%（17%）であり、現実的には適えられていないが将来的には勤務の軽減を希望しているという現状がうかがえる。

IV 仕事と育児の両立について

女性の36%が精神科選択時に育児のことも考慮したと答えており、その理由としては、「離職後の復帰がしやすいから」、「時間外勤務が少ないから」などがあげられている。育児を迎えるにあたっては男性の半数、女性の8割が勤務形態を変

更したいと考えており、現状での当直の多さを反映してか当直の免除を希望するものが圧倒的に多かった。女性では「非常勤勤務」への変更を希望するものが男性に比べ多い傾向であり、育児支援のポイントとなると考えられる。育児中の離職率の高さが他科にて問題になっているが、実際に育児を迎えた際に想像以上に困難を伴うため、やむをえず離職せざるを得ないのがその要因の一つではないかと考えられる。そこで、育児前の医師に対し、仕事と育児の両立が困難だと思うかと質問し、育児中の医師に対してはさらに両立が想像以上に困難であったかを質問したが、育児前の男性の87%、女性の100%が困難になるだろうと回答し、意外にも育児中の方が困難であると答えた割合は少なかった。周囲の育児中の医師達が両立に苦労している姿を目の当たりにして両立できるか強く懸念していることが考えられる。Handelsman ら²⁾は女性がより社会進出するためにはロールモデルとなるようなパイプラインの存在が必要であると指摘している。実際に仕事と育児を両立している医師がキャリア形成や抱える困難について助言するといった、パイプラインの存在により、具体的な両立策を講じられる可能性があり、何らかの形で勤務継続の可能性を探れるのではないかと考えられる。

V 今後の対策について

1) 勤務の見直しと多様な勤務体系の模索

現在は時間外勤務や当直勤務などの過重労働が常態化しており、今後この状態が続くことへの不安、またこの状態へ育児が重なることへの不安が生じているために、男女とも短時間勤務や非常勤勤務を希望していることが推察される。男性医師に比べ女性医師のほうが勤務形態に対する育児などのライフイベントの影響が強いことがわかったが、一方男性医師の中にも将来短時間勤務や非常勤勤務を望むものがあり、男女ともに勤務の見直しと今後の勤務体系について考慮する必要があると思われる。

オランダで実施された一般開業医、内科医、麻

酔科医, 眼科医, 精神科医を対象にした調査³⁾では, 50 % 以上の医師が労働時間短縮の必要性を感じ, 非常勤勤務を希望しているという結果であった。男性医師は年少の子が5歳以下である場合に, 非常勤勤務を希望しており, またより年配の男性医師はフルタイム勤務を希望するが, 若い医師は男性も女性も非常勤勤務を希望していることが述べられている。

以上より, 今後男女ともに, 現在の勤務状況を見直し, 勤務日数, 勤務時間, 勤務内容について, 個々人の状況に対応しうる多様な勤務体系を検討する必要がある。また, Heiligers ら³⁾は, このような勤務形態に関する調査においては, 病院など組織環境側からのアプローチも重要であると述べており, 今後, 医師だけでなくその勤務先である病院などを対象とした実態調査も必要になるであろう。

2) 仕事と育児の両立支援策

一般女性の年齢階級別潜在的労働力率は, 結婚, 出産, 子育て期に低下しM字型になるが, 30~40代の女性医師の労働力も他年代と比較して10~15%低下している。上田ら⁴⁾の研究によれば, 未婚女性医師7%は子どもを持った場合に仕事をやめようと考えている。今回の研究では, 女性医師の8割が子どもを持った場合に勤務形態を変えたいと考えてはいるものの, 将来の希望勤務先に関する質問では医師以外と答えるものはおらず, 仕事をやめたいと考えている医師はいなかった。ただし, 調査の限界として, 実際離職したものは追跡が困難であるため, 実際離職せざるを得なかった医師についてはさらなる実態の把握を要する。一方, 平成17年1月に横浜で開催された「女性医師支援フォーラム」の報告書によると, 日本医師会員を対象にした調査で女性医師の約20%が出産後休職または退職しており, 実際に両立に直面した際に勤務を続けられない事

情が現存しているといえる。

離職の原因としては, 現在の過酷な労働環境に育児が重畳することが大きく, 労働環境の検討については前述したとおりであるが, 両立支援策もより現実的に利用可能であることが期待される。日本小児科学会で行われた「小児科医師現状調査」の速報によると, 育児中の女性医師に対する支援策として, 保育所の整備などの育児支援, 勤務形態を柔軟にするなどの就労支援, 生涯教育や再教育などの復職支援の必要性が強調されている。

おわりに

卒後12年以内の男女若手精神科医師を対象に, 現在の勤務形態と将来希望する勤務形態の調査および仕事と育児に関する意識調査を行った。今後の勤務形態の見直し, 多様な勤務体系の模索, その上で仕事と育児の両立支援策をより具体的に考えることが必要である。今後はさらに勤務先である病院側を対象とした実態調査および実現可能な対策の検討が必要になると思われる。

謝 辞

今回アンケート調査にご協力いただいた, JYPO メンバーおよび若手精神科医師に感謝いたします。

文 献

- 1) 平成19年4月11日付朝日新聞
- 2) Handelsman, J., Cantor, N., Carnes, M., et al.: Careers in science; more women in science. Science, 309; 1190-1191, 2005
- 3) Heiligers, P.J.M., Hingstman, L.: Career preferences and the work-family balance in medicine; gender differences among medical specialists. Social Science & Medicine, 50; 1235-1246, 2000
- 4) 上田聡子, 中村真之, 野上裕子: 女性麻酔科医の現況に関する調査研究 (続報). 日臨麻会誌, 26; 418-428, 2006